



門の内に入って来られない子ども

——内と外の間を揺れ動く心——

津守 真

幼い子どもがはじめての場所にすぐに入っていられないのは、だれでものことである。そのときに大人があせると、注意深く傍らにいれば分かるはずの繊細な子どもの気持ちを察することができなくなる。だれかが子どもの動きにセンシティブになって過ごすと、子どもはその人を媒介にして内と外の世界を関連づける。そういう子どもの保育をして数年を経ると、最初門から入って来られなかったときの子どもたちの心の動きが分かってくる。私はひとりの繊細な子どもMくんのことからこのことを考えてみ



たいと思う。個人差のあることだが、だれにもある程度共通であろう。

内と外のテーマ

最初の日、Mくんは門から入ろうとせず、泣いて母にくっつき、外に出たがった。私が近寄ると私を手で押しつけた。

そのときには私は気づかなかったが、Mくんの心には、すでに内と外のテーマがあったのだと思う。子どもは見知らぬ外の世界に出てゆくには勇氣がいるし、保育者の助けを必要としている。保育の経過を経て後に分かったことだが、子どもが外の世界に出てゆくまでには、内と外との間を何度も揺れ動き、外から襲し寄せて来る外界を恐れつつ立ち向かい、受け身にとどまらずに能動に変えてゆく体験をせねばならない。まだ出発点に立っているときの子どもの繊細な心を察しないで、すけすけと心の内に踏み込んではいならない。

この一瞬

母親と一緒にやく保育室に入ってきたMくんは、高いところの上にいる子どもを見ていた。母親に手伝って高いところにあげてもらった。そのときまたまた私と目が合ってにっこり笑った。数日後、母親と私とMくんとは滑り台の上に行った。ひ



とりの子どもが私を押し、子期せずに私は滑った。Mくんが私の背中につかまって滑って来た。私は滑り降りたMくんと一瞬目が合って互いに笑った。落下の感覚を共有した驚きと喜びがあった。その感覚を味わいつつ、滑り台の下でしばらくじっとしているMくんは立ち上がり、また階段を上って滑る。私は何もしなくともよい。子どもと現在を共有しそこに生ずる小さな自発性を動くままにしていればよかった。気がついたら一時間たっていた。たいしたことをしたわけではないのだが、Mくんと一緒に滑り降りて目が合った、この一瞬が子どもを力づけたのだと思う。

この後もMくんは、滑り台を滑り降りることを好んだ。Mくんには高いところから重力で下に落ちることが特別に快いようだ。いつも滑り台で私と目を合わせて、ニコッと静かに笑ってから滑る。

取られる前に放り投げる

Mくんにはもうひとつ顕著なことがある。他の子がMくんの自動車を取ろうとする時、取られる前に自動車を床に放り投げる。取られるくらいならその前に自分から手放したほうがまだという精神である。これは大人同士の間でもときどき経験することである。他人から自分が批判される前に自分の仕事や部署を手放す場合がある。第三者から見ると随分性急だったり、あるいは攻撃的に見えることもある。しかし、そ



の人は外から来るものを恐れているのである。だれにもあることだが、人によってはこのような外と内との関係に特別に繊細である。

こうして随分慣れてからも、Mくんは、朝、門から入るのをいやがることしばしばあった。F先生が考案して、籠に入れて引張るとすぐに入ってくる。Mくんは、静かに手をちよっと上げて出発の合図をする。F先生の保育はこの子どもと外のテーマにマッチしていることに私は感心した。子どもが手を上げて出発の合図をするのを待って大人が引張るのも、子ども自身の選択をたいせつにする仕方である。

電車を目の前にかざして動かす

Mくんは電車を目の前にかざして動かすのが好きである。これを自閉症の特徴とする見方があるが、私はその考えはとらない。私が別の電車を同じようにやっている、Mくんはすぐに興味をもち、手を出して私の電車を取った。そのうちに、Mくんは私の膝に座り、私によりかかって電車を動かした。随分長くやったので足が痛くなったが、Mくんと同じ方向を向いていたので、私はMくんの繊細な心の動きが分かった。Mくんは電車を動かしていたのではないかもしれない。電車窓の間から見える格子縞の透き間を通して向こう側の景色が動くのを楽しんでいたのかもしれない。



こうして日がたつうちに、Mくんは次第にひとり電車や玩具をいじりはじめた。あるとき、Mくんが電車を動かしているわきで、私はレールの斜面に、連結した電車を置いて、それが滑りおろるのを繰り返していた。Mくんはその電車を取って斜面に置いた。うまくレールに乗らないが、何度も試みた。また鉄橋の柵をレールの溝に沿って直立に立てた。レールと、鉄橋の柵と斜面とが組合わさった立体ができる。つまりそこにひとつの構築物（結合のイメージ）ができた。踏切を上げたり下げたりして遊ぶ。Mくんの能動性は、結合と直立に向かっている。コーナーに段ポールを見つけて、それを私に垂直に立てさせた。私が段ポールの家の中にはいると、Mくんも入って来て窓から外を見る。外に出たり、また中に入る。これまでMくんの結合と直立の構築物は、指先の小さな空間で行われていたが、いまや全身を動かす段ポールになった。しかしまだそれは母とMくんと私とで作った空間においてである。それ以外の人が入るとだめになってしまう。

内と外の間を揺れ動く心

約一年が経った。

ある日、朝のうち、Mくんはトランポリンを自分でとんだ。そのとき、鉄棒に頭をぶつけ泣いて母に抱かれた。予期しない災難に受動的に曝された。こんな小さなこと



でもMくんにとっては大きい。トランポリンの上昇運動は、一挙に崩壊し活動は継続できなくなる。母に抱かれ、母親の髪を引っ張る。そうすると気が済んで自分で歩いて外にゆく。いまこの子どもは受動を能動に変えることを試みつつある。

ある日、Mくんはミニハウスにミニカーを入れたり出したりして遊んでいた。私は、内と外の間を揺れ動く心の表現と思った。二台のうち、一台は青で、一台は黒である。Mくんは青を動かしているので、私は黒を動かし、ときどきガレージに戻ったり、外を遠くまで回ってからガレージに戻った。駐車場と言って中に入れ、積み木を並べて自動車道路を作った。こうして四十〜五十分、昼食までよくあきないと思うくらい繰り返した。

数日後、Mくんは実習生と門の外側で子供用自動車に乗り、門の中に入ったり出たりして遊んだ。ミニハウスで車庫入れをして遊んだのを現実に行っているように思えた。Mくんは内と外のテーマを現実の場に移した。

Mくんはガレージに自動車が入っているマンションの広告を塗りつぶした。毎日のようにいくつも塗りつぶした。内と外のテーマに強い関心があることが分かる。

Mくんは庭で砂をやっていた。それからマンホールの蓋の格子に石を乗せて、石がマンホールの暗い水の中に落ちそうになると、「あぶないあぶない」と言った。落下には彼の危機感が伴っていることが分かる。長い時間そうして遊び、帰りに弁当をば



くばくと短時間に全部食べた。

午後、子供用自動車に乗って、わざと溝に落ちそうにした。それを何度もやった。

二年目の末のことである。Mくんは以前にやっていたように電車を目の前で動かしていた。私がそばにいたが、双方ともどうしてよいか分からず戸惑った。Mくんはもはやずっと先を歩んでいるのに、以前の状態を見られてしまったという戸惑いのように私は感じた。若い実習生が来ると喜んで飛んでいった。午後になって、箱積み木の間を渡したはしごを自分でわたり、渡り終えたとき「セイコウ」と言った。はしごの透き間から私と目を合わせて笑い合った。私はMくんとの初期の関係を卒業したのを感じた。

こうしてMくんの一連の保育を経過してみると、最初の日に門から入ろうとせず、私を押しつけた子どもの中には内と外のテーマがあったことが分かる。

保育者は、子どもが新しい環境に入っていない、母親から離れないと言う前に、子どもの動きに敏感になって、それに答える。そのとき子どもは自分の心にあるテーマを展開させる。